メルビル・デュイ時代*

——デュイにおける教育の設定とその伝統——

小　倉　親　雄

1

1883年メルビル・デュイ (Melvil Dewey, 1851-1931)が，独立した図書館学の教育機関について，その構想を始めて発表したときから，“1923年の革命的思想”[1]とまで呼ばれている，いわゆる“ウィリアムソン報告”[2]が公表されて，教育の改革が強く唱えられるようになったその間40年間を，ホワイト教授 (Carl Milton White, 1912-)は，“図書館教育における第一の革命期”[3]と名づけている。その意味は，デュイによって切り開かれて行ってものとはまた別の，新しい出発点が，この報告書を契機として設定されて行くことになったからである。すなわちデュイによる図書館学教育の開基が，“大いなる革命”[4]の始まりであったとすれば，1923年以降は，第2の革命期であり，現代はそれへの修正期と見ることができるであろう。普通には1948年をもって，それへの転換期と見なしている[5]。

この第一の革命期は，一般にまた“デュイ時代”[6]とも呼ばれているものである。もちろんこの時代の終りを画している1923年といえば，長命であったデュイにとってもすでに晩年（72歳）のことであり，実際には図書館学教育界の第一線を引退してからでも，すでに17年を経過している。それにも拘らずこの年までをも含めて“デュイ時代”とするのは，彼によって新しい転機に培われて行ったその伝統が，なおこの時期に及んでも支配的な力を留めているものとして人々に受けとられて来たからであった。自然この時代の終期に言及し，新しい時代の到来に触れるものは，その多くが“デュイ的伝統”あるいは“デュイ学派”と呼んで来たものを克服し，その上に立つ新しい教育の在り方について主張する態度を執っている。中にはまたデュイ個人を攻撃するような言辞を用いるものも見られない訳ではない。しかしながら“ウィリアムソン報告”自体は，特にデュイの名を挙げたり，彼の事績に直接言及したりしてこれを批判するが如き態度をとっているものではない。内容そのものは‘まことに大胆であり，また仮借なき報告書’と評されている通

---

* この稿は，拙稿「メルビル・デュイと図書館学教育」(京都大学教育学部紀要第12号 1966年3月）の続篇として執筆したものである。

1) Vann, Sarah K.: Training for librarianship before 1923. Chic., ALA., 1961. p. 191.

2) 拙稿「ウィリアムソン報告」と図書館学教育 1966年7月 京大アメリカ研究シリーズ第2号所収（「アメリカ教育思潮の研究」のうち)。

3) White, Carl M.: The origins of the American library schools. N. Y. Scarecrow, 1961. p. 7.

4) Danton, Periam J.: United States influence on Norwegian librarianship, 1896-1940. Berkeley & Los Angeles, Univ. of Calif., 1957. *Preface*.

5) 一般には“Williamson to 1948”としてその時期を区切っている。

6) “Dewey to Williamson”.

りであるが，しかしその取扱方は，あくまでも全般的・客観的であり，それ故にこそ，決定的なものとして，高い評価を受けるに至ったものである。事実ウィリアムソン自身はデュイをもって“創造的図書館人”(creative librarian)とし，深い景仰の念をもってその事績を回想するとともに，その残した創造的遺産が如何に大きなものであったかについて人々の関心を新にし，ややもすればデュイが，ごく偏狭な角度において理解されている場合のあることを指摘して，そうした人々の蒙を啓く態度を執っているほどである[7]。

しかしながらメトカーフ(Keyes Dewitt Metcalf, 1889-)の言葉をかりると，この報告書においてウィリアムソンが，特に当時における図書館学校の教育ならびにその方法を痛烈に批判しているのは，直接にはその伝統的な形態であり，具体的には，専らそれが実際的なものを教える形で仕組まれて来たことに対してであった[8]。そしてこのような古い形態を速に脱却して，研究と教育との双方にわたり図書館学は，専門的かつ理論的な面に専念して行くべきであるとする点に，彼の主張は大きくかかっている。このことはとりも直さず，いわゆるデュイ的伝統と呼ばれているものに対する批判の言葉として受けとることのできるものである。

2

この“デュイ的伝統”という言葉に対してウィルソン教授(Louis R. Wilson, 1876-)は“極端な技術”という表現をそれに置きかえて用いており[9]，プレディーク(Albert Predeek)はまたデュイにおける図書館学教育が専ら実際的なものを目指して発足し，“デュイ学派”のもつ根本的な欠陥は，知的・学問的なものを軽視したところにあるとする批判を加えている[10]。コロンビア大学のリー教授(Robert Leigh)もまた，初期の図書館学校はいずれもデュイ的な方法の影響を受けて，その枠外に出ようとはせず，その結果は教育のための多くの時間が実際的な教科についやされ，とかくその観点が非常に狭い領域のものに限定されてしまったことを挙げている[11]。シカゴ大学のバトラー教授(Pierce Butler, 1886-1953)が，長い間図書館人はプラグマティズムの単純な孤塁に立籠って来たとしているのも，同じような側面に触れたものである[12]。

以上のように，デュイの名を冠し，それに伝統・学派・方法などの語を連ねて多くの人々が理

7) Williamson, Charles Clarence: Melvil Dewey: creative librarian. Urbana, Univ. of Illinois Press, 1943. *Illinois Contribution to Librarianship, No. 1, p. 3-8. (Fifty Years of Education for Librarianship)*
8) Metcalf, Keyes D. & others: The program of instruction in library schools. Urbana, Univ. of Illinois Press, 1943. *Illinois Contribution to Librarianship, No. 2, p. 35*
9) “Dewey tradition”; “excessive technique”. Wilson, Louis R.: Historical development of education for librarianship in the United States. *Education for librarianspip, ed. by Barnard Berelson. Chic., ALA., 1949, p. 56.*
10) Predeek, Albert: A history of libraries in Great Britain and North America, *tr.* by Lawrence S. Thompson. Chic., ALA., 1947. p. 126.
11) Bryan, Alice 1.: The public librarian. N. Y., Columbia Univ. Press, 1952. p. 302.
12) Butler, Pierce: Introduction to library science. Chic., Univ. of Chicago Press, 1933, xi-xii (*The University of Chicago Studies in Library Science*)

解しているのは，技術・実際・実務の概念であり，これに対して“ウィリアムソン報告”が，長くデュイの主導下に築き上げられて来たものからの離別を画する重要な契機をつくったとされるのは，以上のような概念からの脱却を図る方向に導いて行ったことを意味する。もちろんこれらの表現自体に誤りがあるというのではない。しかしながらウィリアムソン自身がすでに示唆しているように，デュイの全体的な姿が，このような端的な表現によってとかく見失われ勝ちな結果をもたらしていることもまた否定し得ないであろう。

デュイがコロンビァ大学とオールバニー（Albany, N. Y.）との2つの図書館学校を通じて直接学生の教育にあたったのは，1887年から1906年に至る19年足らずのことであった。そして彼の教育に対する構想が大きく躍動し続けていたのは，むしろ“コロンビァ大学時代”の方であって，1883年5月この大学の図書館長に迎えられたときから，事実上彼がこの大学を去って行った1888年12月におよぶ5個年半余りの期間である。“オールバニー時代”はその3倍に近いおよそ16年間にわたってはいるものの，この間の教育は，本質的な面においては，コロンビァ大学において実施に移し得たものと同一であり，かえってここではニューヨーク州立図書館内における実習業務が非常に強化された形をとり，自然図書館に直接的な関係をもたない科目の授業は，一層制限される形をもつものとなった[13]。それというのもデュイがオールバニーに赴任して行くに先立って，ニューヨーク州当局に対して提出した教育計画は，かって彼がコロンビア大学理事会に提出したものと同一であり，1891年2月12日付をもって州理事会の承認を得たものであった[14]。

このようにデュイ自身によって主宰された2つの図書館学校は，1つは大学という教育・研究機関の中で，他は州立図書館という奉仕機関の中で，すなわちその背景と環境とを全く異にするものの中で運営されて行ったにも拘らず，教育の内容と方法の上では，ほとんど同一のものが保たれたことは，結果的にいえば，いわゆる“デュイ的伝統”の基礎を強固な形に築き上げて行く原因ともなったであろう。事実オールバニーのものについていえば，この学校は州立であり，名目的にはニューヨーク州立大学に付属する形式を執っていたとはいっても，それは大学としての実体をもたない単なる“紙上の大学”（paper university）にすぎず，その点まことに当時としてもユニークな存在であった[15]。自然図書館学校は，州法の規制を受ける面が非常に大きく，従って当初決定を見た運営方針を中途において修正・変改することは至って困難であり，そのため根本的な問題については事実上それがほとんど行われておらず，そのことが内容上の改善や進歩を図る上に大きな障害となり，教科課程の面でも固定化をもたらす一因となつたことが指摘されている[16]。

---

13) Trautman, Ray : A history of the School of Library Service, Columbia University. N. Y., Columbia Univ. Press, 1954, p. 24.
14) White, Carl, M.: *Ibid.*, p. 77.
15) *Library Journal, Vol. 57, No. 3 (Feb. I, 1932). Melvil Dewey.*
16) Mann, Margaret : A history of the Armour Institute Library School, 1893-1897. *Illinois Contribution to Librarianship, No. 1, p. 14.*; White, Carl M.: *Ibid.*, p. 183.

しかしながら“デュイ時代”に含まれている期間は，1887年コロンビァ大学内に図書館学校が発足した時から数えても36年という長い期間にわたっている。しかもデュイが直接教授者の立場にあったのはその中の19年足らずであり，その時代の後半（1906-1923）を占める部分は，図書館界および図書館学教育の第一線から引退した時期に該当している。年齢的にいってもそれは55歳から72歳に及ぶ期間であり，彼自身による積極的な活動は専ら他の面に傾倒されていて，僅少の例外を除くの外は，図書館関係の公的な会合にもその姿を見せなかった程である。それにも拘らず，その後の時期をも含めて“デュイ時代”とするのは，彼がその前半において確立したものが，そのまま後半期をも支配するほどに強力なものであったと解するものの多いのは止むを得ないとして，より近い真実は，その当初からデュイのものに向けて来た多くの批判も，結局はそれに代って行くほどの現実的な影響力を持つに至らなかったことに存すると見るべきであろう。そしてこのこと自体がまた重要な意義を担っている。

ホワィト教授によると，1887年から1920頃までは，どの図書館学校についても，その目的とするところ，およびそれらが目指している方向には，取りたてていうべきほどの相違も変化も見出し得ないという[17]。すなわちその間に画一性が保たれて来たとするものである。しかしそれは図書館員を，どのような形態と内容によって教育し養成して行くかについての理論(theory)が，1880年代の中葉をもって確立してしまったことによるのではなく，むしろそれが1つの教義(dogma)という形で取扱われて行ったことを意味し，あるいはまたそうした理論が採り上げられ，それについての論議をつくすことはほとんどなかったと言った方が，より事実に近いであろうとも述べている。すなわちデュイによって創始されたコロンビァ大学内の図書館学校の在り方が1つの規範となって，それ以後に開設されて行った多くの図書館学校がそれを踏襲する形となり，さかのぼってその教育の在り方を更めて掘り下げて見ようとはしなかったという意味である。このような言葉は別の角度から考察すると，“デュイ的伝統”は，実際にはデュイ自身には直接関係なく，彼が教育の第一線を退いた後においても，その設定したものが，オールバニーの州立図書館学校を始めとし，他の図書館学校においても継承され，それによって伝統と呼ばれ得るものに固められて行ったと見なすことができる。そしてこのこと自体が実はまた大きな批判の対象ともなっているものである。すなわちウィリアム・ウィリアムソン(William Landram Williamson)が，“規則に対する無気力な奴隷”[18]といったのは，そのような情勢を形容したものであり，同時に彼は，その因って来るところをデュイのもつ圧倒的な影響力に帰している。そしてアメリカ図書館協会，“ライブラリー・ジャーナル”誌，それにオールバニーの州立図書館学校など，デュイが直接主宰し，あるいはまた主導的な役割をもった組織・機関誌が，それに深い関連を持つものと見なしているのである。しかしながらこの場合においても，より重要な課題は，そのような影響力が，

17) White, Carl M.: *Ibid.*, p. 122.
18) Williamson, William Landram : Frederick Poole and modern library movement. N. Y., Columbia Univ. Press, 1963, p. 98.

デュイの退隠後においても依然として維持されて行ったことの真の原因であろう。それは単に1個人の感化力のみでは律し得られない，より深いものがその背景に潜んでいると見なければならないからである。

3

たしかにその初期においては，デュイによる直接的な影響には非常に大きなものがあったであろう。このことはデュイのものについで，1890年代に引つづいてつくられて行った3つの図書館学校，すなわち“図書館学教育の開拓校”と呼ばれているものにおいては特に顕著である。プラット学院図書館学校，ドレキセル学院図書館学校，アーマー工芸院図書館学校[19]がそれであり，これらは，デュイがコロンビァ大学およびオールバニーにその根をおろした図書館学校のいわば分枝校(branch schools)である。そして収容能力の面で大きな制約下におかれていたデュイの学校を補い，激増して来る入学志望者を受けとめ，また地域的な教育の分散を可能にし，広くそれを普及させた点においても，その後の発展に重要な役割を果したものであった。自然デュイにとって，このような図書館学校の増設は大きな関心事であり，特にアーマー工芸院図書館学校が，18-97年アーバナ(Urbana)の地に移されて，イリノイ州立図書館学校となり，今日におけるイリノイ大学図書館学部の基礎が確立された際に示したデュイの熱意は，この間の事情をよく物語るものである。1943年この学部は，アーマー工芸院に発足した年から数えて50周年を迎えることになったが，当時その学部長であり，同年コロンビア大学図書館学部長に転じたホワイト(Carl M. White)はこのことに言及して

> 彼〔デュイ〕の教え子たちによって創立された他の学校と同様，このイリノイ大学図書館学部もまた，その起原をデュイの感化に負うところの多いものである。彼は最初からこの学校に積極的な関心を示し，アーバナに移って以後もしばしば訪れて来，この大学に語り伝えられているところによると，最初は大学図書館の古い建物の，しかも地階に予定されていた図書館学校が，結局は広々とした明るい場所に切り換えられることになった最後の瞬間に対する責任を担っているのも実はデュイであるという

と記している[20]。それが事実であったか否かの問題は別として，細部にわたり新しくつくられて行く図書館学校に対して異状な関心を抱いていたデュイの姿を伝える1つの挿話としても受けとることができるであろう。

以上3つの図書館学校が，デュイのものに対する分枝校とされる所以は，単にデュイのものがその起原となって，始めてそれらが誕生して来たというだけの意味ではない。すなわちそれらの学校創設の任に当った直接の人物が，いずれもデュイの学校においてその教えを受けた人々でもあったからである。そのうちプラット学院のものは，コロンビァ大学の図書館学校開設と同時に入学した第1期生(pioneering class)であると共に，さらに引きつづいて上級学年(senior)に

---

19) Pratt Institute Library School, Brooklyn, N. Y. (*f*. 1891); Drexel Institute Library School, Philadelphia, Pa. (*f*. 1892); Armour Institute Library School, Chicago, Ill. (*f*. 1892)

20) Illinois Library School Association. Fiftieth Anniversary Committee : Fifty years of education for librarianship. *Foreword*.

進学した9人（女性2人）中の1人でもあったプランマー(Mary Wright Plummer)によって，ドレキセル学院のものは，オールバニーの州立図書館学校の第1期であったクレーガー（Alice Bartha Kroeger, -1909）によって，アーマー工芸院のものは，オールバニーの第2期生であったシャープ（Katharine Lucida Sharp, 1865-1914）によりそれぞれ創設されたものであった。ウィリアムソンがデュイのものをもって，長く図書館学校の“ふ卵器”，すぐれた図書館学校や学部長の供給源となったとのべているのは[21]，このような形で先ず発展して行ったこの国の図書館学教育機関の姿に触れたものであり，たしかに1890年代に入って，1年毎に図書館学校が新設されて行ったこと自体は，正しく“ダイナミックな歩み”を示したものということができるであろう。しかしながらそれと同時に，これらの教育機関は，それを全体としてながめた場合，結局はやはりデュイによって切り拓かれて行ったその軌道をたどって行くものになったとされているところに[22]，重要な意味が含まれている。

しかしながら細部にまで及んでそのような事情が見られたという意味ではない。例えばシャープによるアーマー工芸院図書館学校は，その最初は（1893—1894）週40時間の1個年課程として取りあえず発足したものであり，自然デュイの州立図書館学校第1学年の教科にならう形となった。この態度はイリノイ大学に合併された後も存続しているが，内容的には重要な改変の加っている面もある。目録法の如きはその代表的なものであろう。すなわちデュイは，図書館のもつべき基本的な目録形態として分類目録（classed catalog）を固執し続けた人であり，このことは彼の創案した分類法と直接つながりを持つものである。イリノイ州立図書館学校における内容的な改変というのは，直接にはこうしたデュイの態度に対する修正であり，具体的には，分類目録を中心とした目録法の授業形態から，辞書体目録を主体としたものへの移行である。それは卒業生たちが実際に就職して行く図書館のほとんどが，辞書体目録を編成していた現実を考慮したためであった。すなわちデュイ自身は終始目録に対する彼の根本的態度を崩さなかったのに対して，シャープは辞書体目録の授業を主にし，あわせて分類目録にも言及して行く方針を執ったことであり，このことに関してハウ(Harriet E. Howe)は，“こうした変更は，他の図書館学校から，多大の批判を蒙るものとなったが，しかし現場の図書館人からは賞讃を博するに至ったものである”と記している[23]。デュイによって設定されたものが，初期の図書館学校に継承されて行った姿，そしてたとえ目録法がこれらの学校における中核的な教科であったとしても，その教授方針の変更が大きな問題を提起した当時の事情を想察することができる。

またマン(Margaret Mann)によると，1893年までにできた図書館学校においては，“ライブラリー・エコノミー”という言葉を学生たちが耳にすることは非常に多かったにも拘らず，逆に“ライブラリー・サイエンス”という語はほとんど聞くことがなかったという。彼女はこれらの

21) Williamson, C. C.: Melvil Dewey.
22) White, C. M.: *Ibid.*, p. 143.
23) Howe, Harriet : E. Katharine Lucida Sharp, 1865-1914. Chic., ALA., 1953. *Pioneering Leaders in Librarianship, Ist Ser., p. 165.* (*American Library Pioneers* VIII)

学校においては，今日で言えば[24]，書記的な業務（clerical duties）の方にその重点がおかれていたことに言及して，その事実に触れている訳であるが，その業務はこの場合“技術”（technique）とほとんど同義語に用いられており，新入生に対しては，彼らがその意義・有用性を正しく評価し得ない前から，直ちにそれが課される実情であったとも伝えている。要するにこれらの学校においては，非常に限定された内容のもとで，その教育が行われていたことを示すものである。

4

この“ライブラリー・エコノミー”（library economy）という言葉に対しては，現在のところ‘図書館の創設・組織化・管理運営に対して，ライブラリー・サィエンスを実地に応用して行くこと’[25]という定義づけが一応容認された形を執っている。しかしながら，現代におけるこのような統一定義は，過去においてもこの言葉がそれと同じ概念のもとで用いられて来たことを必らずしも意味しない。“エコノミー”という語自体はブラウン（James Duff Brown, 1862-1914）ものべているように[26]，目的的（purposive）な用語である。すなわちすべて物事を時間・労力・経費の面で無駄を除去し，しかも最善の方法で処理することを目的としている場合にこの語が結びつけられ，したがって“ライブラリー・エコノミー”は，図書館業務をそのように処理して行くことを可能にする技術およびサィエンスという意味で彼においては使われているのである。

果してこの言葉がいつごろから使い始められたものであるか，これについて触れた文献に接しないままであるが，1859年公刊されたエドワーズ（Edward Edwards, 1812-1886）の大著“図書館覚え書”[27]の標題には，この言葉がそのままに用いられている。“ライブラリー・エコノミーのハンドブックを含む”とされているのがそれであり，第2冊に収められている第2部（p. 567-1072）の505ページがそれに該当する。ただこの第2部（part the second）は，目次および本文中にあっては，“エコノミー・オブ・ライブラリーズ”とされて，標題紙に記するところとは異った表現が採られており，エドワーズにおけるこの2つの用法は，特に区別されることなしに，同じ様な意味に理解されていたと見ることができよう。内容的には収書・図書館建築・分類と目録・内部管理と公共奉仕の5項目に大別され，そのもとで細かく章に区分して記述されている。すなわちブラウンの用法は，このエドワーズのものと，ほとんど同じ立場においてなされていると見て差支えないであろう。

これに対してピァス・バトラーが，“ライブラリー・エコノミー”をもって，それを“技術時代

24) Mann, M.: *Ibid.*, p. 14.
25) American Library Association : A. L. A. glossary of library terms. 1943.
26) Brown, James Duff : Manual of library economy. 6th ed., by W. C. Berwick Sayers. Lond., Grafton, 1950, p. 1. あるいは改筆者であるセィアーズの言葉とした方が適切かも知れない。
27) Edwards, Edward : Memoirs of libraries including a handbook of library economy. Lond., Truebner, 1859. 1965年ニューヨークの Burt Franklin によって複刻されている（*Burt Franklin Bibliography & Reference Series 72*）

における先輩たちが一様に，もっぱら使用して来た言葉"[28]としているのは，上記の場合とは異った意味をそれに付与しているものである。バトラーがこのことに言及しているのは，アメリカにおいて，"ライブラリー・エコノミー"という語から"ライブラリー・サィエンス"へと移行して行ったその過程の中に，実は非常に重大な課題が介在していることを指摘しようとしたためであった。いまその点について彼の論旨を詳しく展開して行くことは，この場合差当っての課題ではないが，彼によると，ライブラリー・サィエンスという言葉は，その前に専ら用いられて来たライブラリー・エコノミーの内容に，新しく科学性が与えられたことによって，その使用が一般化したものではなくて，科学者的錯誤 (scientistic delusion) に陥ってしまった図書館人が数多く現われて来たことにその原因があるとされ，極めてユニークな解明が試みられている。彼のいう科学者的錯誤というのは，ライブラリアンシップが専門職 (profession) となるのは，それが1つの科学 (science) である限りにおいてのみ可能であるとの思い違いをすることを意味しているのである。

ムンテ (Wilhelm Munthe) によれば，アメリカにおいて"ライブラリー・サィエンス"という言葉が一般化して来，"ライブラリー・エコノミー"に取って替るようになったのは1930年代のことであるという[29]。一方リー教授によれば，"ウィリアムソン報告"以前の図書館学校は要するに図書館技術学校 (library technical school) であり[30]，ホワィト教授も，図書館学教育の初期段階は，図書館員の技術教育時代 (era of technical education of librarians) に外ならなかったとしているが，彼は同時にまたそうした時代の終期を一応1920年と見なす立場を執っている[31]。バトラーが上述のように"技術時代" (technical age) という言葉を用いているのも，結局は同じ時代をその対象としていると見ることができよう。ウィルソン教授によると，それはとりも直さず"極端な技術" (excessive techniques) の時代であり，それをまた裏返しに言えば"デュイ的伝統" (Dewey tradition) そのものであるとされているのである。

以上のように考えて来ると，多くの学者のもつ理解の中では，技術，ライブラリー・エコノミー，デュイ的伝統の3つが堅く結びついている。そして技術時代がほぼ1920年頃にその終りを告げるという見解を採れば，ライブラリー・エコノミーという言葉もそれと運命を共にしてその主導的な位置を次第に失って行き，"デュイ時代"の終期とされる1923年は，そのような情勢との間に一線を画した重要な年として取扱われるのである。直接には"ウィリアムソン報告"がその線上に大きく立ちふさがった形を執っているが，しかし1930年代においてもそうした古いものが完全にぬぐい去られた訳でもなければ[32]，1950年代に入ってさえもなおそれは依然として同様であった。たとえば1951年バトラーによって[33]

28) Butler, Pierce : Librarianship as a profession. *Library Quarterly, Vol 21 (No. 4), 1951 (Oct.), p. 239, footnote 6.*
29) Munthe, Wilhelm : American librarianship from a European angle. Chic., ALA., 1939, p. 133. この書は1964年，Shoe String Press (Hamden, Connecticut) によって複刻されている。
30) Bryan, Alice 1.: *Ibid.*, p. 209.
31) White, C. M.: *Ibid.*, p. 90.
32) Berelson, Barnard, *ed.*: Education for librarianship, 1949, p. 56.
33) Butler, P.: *Ibid.*, p. 238.

図書館教育はもともと，目録法および分類法の細部にわたり，ち密に訓練して行くことであると信ぜられていた。そして，そのような時代にこの教育のコァ・カリキュラムが晶化されてしまったため，今日においてもそれは溶解され得ないままであり，そのことが，教育上の改革をはるかに困難なものとしている

と語られているのは，その一端に触れた言葉として聞くことができる。

要するに“ライブラリー・エコノミー”という言葉は，現在においてはほぼ統一的な定義に到達しているとはいっても，それはそのまま過去の用法に当てはまるものではなく，特に“デュイ時代”との関連のもとにそれが用いられている場合には，深く技術的なものと結びついた意味で理解されており，時にはまた“ライブラリー・サィエンス”という言葉に対置する関係をももっているのである。

5

クック（Margaret G. Cook）によれば，“ライブラリー・エコノミー”は，デュイの時代に，そのような呼ぶ方がなされていた言葉であり，デュイはそれの開拓者（pioneer）であるとされている[34]。またクローム（Mary Elizabeth Krome）は，デュイによる十進分類法創案のことに言及して，‘1873年より以前は，ライブラリー・エコノミーの歴史も暗やみのままであったに相違ない’と記している。この２つの言葉は，ライダー（Fremont Rider）が，デュイ80歳の誕生日を言寿ぐソネット（double sonnet）の中で，彼が全く混乱のままであった暗黒の図書館界に，１つの明るい光を見つめ，人々の混とんとした思想に論理の形式を与えたことを讃えている言葉[36]と相関連するものである。直接には分類法を指しているが，延いては図書館業務の技術面一般に触れたものと見て差支えないであろう。

果して“ライブラリー・エコノミー”という言葉がこの国においてはデュイによって使い始められたものであるか否かは別として，それの使用が一般に普及を見たことには，彼の力が与って大きいと見ねばならない。また彼がこの言葉を始めて使用した時期がいつであったかについても，必らずしも明らかではないが，1883年８月には，アメリカ図書館協会の総会において，“スクール・オブ・ライブラリー・エコノミー”についての構想を発表するとともに，同時に“ライブラリー・ジャーナル”誌（９-10月）にも，同名の標題をもってする一文を寄せており，一方コロンビァ大学は，1884年５月５日の理事会において，設立さるべき学校の名称は“コロンビァ・カレッジ・スクール・オブ・ライブラリー・エコノミー”とすることを正式に決定している。そしてデュイがこの言葉のもとで理解しているところを，具体的に表明している最初の文献は，おそらく彼が大学の名において発行していた“サーキュラー”（1884年）であろうと考えられている[37]。すなわち

34) Cook, Margaret G.: The new library key. N. Y., Wilson, 1956, p. 6.
35) Dawe, George Grosvenor, *ed.*: Melvil Dewey ; seer : inspirer : doer 1851-1931. N. Y., Lake Placid Club, 1932. p. 180,
36) “M. D.” OF THE “D. C.” (Rider, Fremont : Melvil Dewey, Chic., ALA., 1944. *American Library Pioneers*, VI)
37) White, C. M.: *Ibid.*, p. 127.

ザ・スクール・オブ・ライブラリー・エコノミーは，ライブラリー・エコノミーという言葉を最も広義に解釈して，図書・パンフレット・逐次刊行物など，そのいずれのコレクションであっても，それの選択・購入・配列・目録の作製・索引の付与・管理運営などを，最善にしてしかも最も経済的な方法で処理するために必要とされるすべての特殊な訓練を包含するものである

としているのがそれである。このことについてホワイト教授は，ライブラリー・エコノミーに対するこれと同一の定義は，純粋に技術的な教科課程が始めて具体化されて行ったとき，繰返しデュイが用いたものであると記している[38]。すなわちこのような定義は，それを裏返しにいえば，彼の図書館学校は全く技術的な訓練をその内容とすることを明にしているものだという意味である。

デュイにおける技術的 (technical) という言葉は，“スクール・オブ・ライブラリー・エコノミー”が，学校名として選ばれたいきさつを説明するに当って使用されている。すなわちこうした学校として執るべき最善の策と考えられたのは，何よりも先ず技術的な部分 (technical part)のみをもって始めて行くことであり，こうした考え方が，“ライブラリー・エコノミーの学校”という意味の名称決定の原因であるとしているのである。このことは彼においても，技術的なものとライブラリー・エコノミーとの２つが密接に結びついたものであったことを物語っている。それはまた同時にデュイにおいても“ライブラリー・サィエンス”と対照的に用いられているのである。すなわち彼によると，ライブラリー・エコノミーの方は，そのもつ意味において限定的 (limited) であり，これに対してサィエンスの方は包括的 (generic) であって，それはエコノミーをも含めて，先ず何よりもビブリオグラフィーを，さらには目録法や分類法を加えたものとしてその当初においては理解されているのである[39]。

同時にまたデュイにおける技術的という言葉の概念は，実際的 (practical) という言葉との深いつながりを持っているものである。すなわちデュイによる図書館学校を特徴的に表現する語としてしばしば引用されるのは，彼がその学校の目的とするものについて，‘それはもっぱら実際的なことである’ (entirely practical) とのべたその言葉であるが[40]，これは1886年，すなわち図書館学校の開校期日もいよいよ押しせまった際，この学校の教科内容を，一応14の題目に整理して発表するとともに，学校そのものの性格について更めて説明したその冒頭におかれているものである。すなわち彼はこの言葉に引き続いて

図書館を設立することが望ましいという決定を見たその時から，さらにはその図書館が完全な形で運営されて行くようになるまで，管理上のことをも含め，引き起されて来る沢山の問題について，それぞれに特別の示唆を与えながら，能う限りの助言をおこなって行くことである

とのべている[41]。これは図書館が現実に直面する実際問題のみがこの学校においては対象とされるという意味であり，冒頭の言葉をさらに敷えんしたものとして聞くことができる。

しかしながらデュイにおける実際的という言葉は，実はまた同時に，‘歴史的および好古的’

38) White, C. M.: *Ibid.*, p. 115.
39) White, C. M.: *Ibid.*, p. 114.
40) Metcalf, K. D. & others : *Ibid.*, p. 49.
41) Vann, S. K.: *Ibid.*, p. 31.

(historical and antiquarian) という言葉に対しても対照的な意味をもって使用されているものである。彼が上記14の題目を列挙するに先立って，‘教科の中に歴史的・好古的なものが含まれて行くのは，そうしたものを勉強することが，現代の問題に役立つ場合のみに限られる’としているのは[42]，彼のこの立場を明らかにしているものである。ホワィトはこれに関連して，デュイはヨーロッパにおいて図書館員が養成されて行くその仕方は，‘余りにも好古的である’(“too antiquarian”) という考え方に立っており，結局彼がヨーロッパ的なものから採り上げて行った唯一のものといえば，図書および図書館の歴史ということになるが，それとてもずっと後に持ちこされた形となったと述べており[43]，事実1886年に公表した14の教科中にはそれが見当らないのである。そして後には，図書館学校が担っている第一の責務は，図書館それ自体に対するものであるという立場から，しかも図書館が真実に求めているものは，教育を受け，それによって図書館に役立つ人，すなわち“trained help”にあるとすれば，図書館にとっても，また学校を巣立って行く人々にとっても，沢山の実際的な事柄に集中しておいた方が，はるかに教育としては直接的であり，また大切なことであると主張し続けるようになったとも記されている。

6

1887年，いよいよコロンビア大学内に“スクール・オブ・ライブラリー・エコノミー”が発足したとき，当時プリンストン大学の図書館長であったリチャードソン (Earnest Cushing Richardson, 1860–1939) により，‘この学校が目的としているところは，ライブラリー・サィエンスというよりは，むしろただライブラリー・エコノミーのみを教えることである’として，それを遺憾とする言葉が述べられたのは，デュイの図書館学校に加えられた最も初期の批判である[44]。そしてさらに1890年彼がアメリカ図書館協会によって任命された委員の1人として，オールバニーのニューヨーク州立図書館学校を訪れ，その実情視察をもとに，9月，ニューハンプシャー (New Hampshire) において開催された同協会の総会において報告したものは，いわば公的な立場をもってなされたものであると共に，最も‘批判的な言葉’[45]として知られているものである。

すなわち

> この学校が目的としているところは，ライブラリー・エコノミーを教えることであり，そのためライブラリー・サィエンスの領域をカバーしている形を執っているとは言えない。このことは非常に遺憾なことであり，従って大きな志を抱いている図書館員が，しっかりした基盤をつちかってゆく上に必要とされるすべての分野を覆うところまで，その領域は拡大されて行かなければならない

としているのがそれである。要するにこの学校が目的としているところの偏狭性を指摘し，ライブラリー・サィエンスという言葉がもつ分野のすべてを包括して，教科課程の範囲を拡大して行くべきであることを主張したものである。ただここでリチャードソンが“ライブラリー・サィエ

42) *Ibid.*
43) White, C. M.: *Ibid.*, p. 84, 115.
44·45) Vann, S. K.: *Ibid.*, p. 57.

ンス”という言葉を用いているのは，今日におけるその概念とは著しく異なるものである。それは一方においては書誌学の研究（study of bibliography），他方においては写本類の取扱についての研究（study of the handling of manuscripts）という2つの面をその内容とした学問の意味であった[46]。このことはとりも直さず，当時の人々がこの言葉のもとに理解していた概念の一端を物語るものであると共に，同時にそれはヨーロッパにおいて，図書館員が養成されて行くその実情を背景にしていると見ることができる。

リチャードソンはその著“図書館の起原”の中で“図書館学校の起原”（The beginnings of the library schools）について1つの章（第20章 p. 151-155）を設けて叙述している[47]。そして現在における図書館学校の歴史的起原を，遠く紀元前3200年以上も前に存在していたと考えられている寺院学校（temple schools）に求めた上で，この系譜に連なるものとして，古代ギリシャやエジプトの同じく寺院学校，中世の書写室学校，後の大学その他に設けられた古文書学（paleography）や古記録学（archival science）の学科を挙げ，ヨーロッパにおける図書館学教育の学問的な側面（science side）は，伝統的に古文書学や古記録学を中核にして存続して来た点を強調している。すなわち彼のいう“ライブラリー・サィエンス”は，この学問的な側面を形成しているものに外ならないのである。そして“ライブラリー・エコノミー”は，ヨーロッパにおいては‘取るに足らないもの’（negligible）と考えられて来たものであるとして，欧米双方における教育の対照的な姿に触れているのである。すなわちヨーロッパの場合は，この‘学問的な側面’に傾斜してしまった“一方的な図書館学校”（one-sided library school）となってしまったが，しかしながら，アメリカの図書館学校が，ライブラリー・エコノミーの方に傾斜してしまったその度合と比較した場合，その角度はヨーロッパの方がむしろ小いとものべている。

すでに触れたように，彼はデュイによって開かれた2つの図書館学校に対して，当初それらが共に，彼のいうライブラリー・サィエンスの領域を覆う形をなしていない点に対して逸早く批判を加えた人として特記されている。しかしながらここにおいては，‘デュイによるコロンビア大学内の図書館学校開設の際は，結局のところ，古写本などについて教えることなどは，ほとんど問題にもならなかった’とし，その原因については，アメリカの場合，写本類（manuscripts）といってもその数は至って少く，記録類（documents）となればもちろんその数は多いとしても，しかし“古記録”（archives）という言葉の中に含まれるものといえば，それはアメリカのものではなくて外国のものばかりであった事情に基ずくことを指摘しているのである。換言すれば彼が最も強力な批判の対象とした事柄を，歴史の若いアメリカがもっている特殊な事情のもとで，終には承認したかの如き表現がここにおいては為されているのである。同時にまたヨーロッパについては，現実に古文書・古記録がおびただしく残存しており，従って司書となる人に対しては，

46) *Ibid.*, p. 207.
47) Richardson, Earnest Cushing : The beginnings of libraries. Princeton University Press, 1914. この書は1963年 Archon Books によって複刻された。

当然のこととして，それらに対する正しい取扱が要請されるとも記している。

もちろんデュイにおいても，“ライブラリー・エコノミー”の領域に止ったままの形態が，図書館学校のあるべき姿として固定していた訳ではない。すでに述べたように，彼における“コロンビア大学時代”は，教育に対する構想が大きく躍動していた時代であった。それだけにまた僅かこの5個年余りの間に見られる思想的な変転も著しい。そのことは同時に，如何に彼がその設定に心労を重ねて来たかを物語るものである。

シカゴ大学の准教授ウィンガー（Howard W. Winger）は，1879年デュイが始めてその構想を公表したことに関連して，彼が提案したのは，実は“アプレンティスシップの組織的計画”（systematic program of apprenticeship）であって，ただその考えを，進んで採り上げて行こうとする図書館人が現われて来なかったために，結局デュイは1883年コロンビァ大学図書館長となるに及んで，今度は新しく“図書館員養成の学校”（a school of librarianship）を提案することになったと述べている。1879年の構想というのは，彼がこの年の5月，“アプレンティスシップ・オブ・ライブラリアンズ”と題して，“ライブラリー・ジャーナル”誌に掲載した僅か2ページの小論[49]であり，図書館員に対しては特別の訓練が必要であることに言及したものである。そして公刊されたものとしてはこれが最初のものであった。すなわちウィンガーが指摘しているのは，デュイにおける当初の構想は，後にコロンビァ大学内に設けられたような，学校という形態を執った教育機関の設立ではなくて，この国においてもすでに長い伝統をもつ“アプレンティスシップ”を，新しく組織的なものに作り上げた形を執ることにあったとするものである。このことはホワイト教授が，従来多くの人々によってデュイは，一館的・徒弟的訓練の時代から，専門職教育（professional education）への転換を成し遂げた人として想起され勝ちであるにも拘らず，実のところ図書館の分野においては，そのアプレンティスシップさえも，組織的なものとしてはそれ以前には存在せず，ために，それに対して1つの組織を与えた形のものとしようとしたところに，デュイにおける教育の発想が見られるとしているところも[50]，結局は同じ見解に立っていると見なすことができるであろう。その観点からすれば，図書館学校という独立した教育機関を大学内に設立することは，その構想の大きな発展であった。しかもデュイはその“コロンビァ大学時代”において，“ライブラリー・エコノミー”の上に，リチャードソンなどのいう“ライブラリー・サィエンス”を積み重ねて行くことによって，彼自身が思考する“ライブラリー・サィエンス”は始めてその形態を整え，図書館学校もまた，その正に在るべき姿を執るという考え方に到達している。1887年5月彼がバーナード総長を通じて大学理事会に提出した教育内容の拡大計画，同時に学校名の改称に関する申請は，その考え方の上に立っているものである。

---

48) Winger, Howard W.: Aspect of librarianship. *Seven questions about the profession of librarianship, ed. by Philip H. Ennis & Howard W. Winger. Chic., Univ. of Chicago, 1964, p. 33. (The Univ. of Chicago Studies in Library Science)*

49) *Library Journal, 4, [147]-48, May 31, 1879.*

50) White, C. M.: *Ibid.*, p. 74.

7

この点に関してデュイは，とかく正当に理解されていない場合が多いように思われる。たとえばイギリスのストークス教授 (Roy Bishop Stokes)[51]が，デュイによる図書館学校の創始と，その後における発展に言及して，イギリスの場合でいえば，極く一般的である科目を，アメリカの図書館学校では採り上げて行く必要を感じないままで発展を遂げたこと，またその原因を，デュイがそれ以前にはない全く新しいものを教科課程の上で重視したことに求めているが如きはその一例であろう。もちろん結果的にはそのような観を呈するに至ったことも事実である。しかしデュイ自身の構想の中には，究極的にはそうしたものをも含めて，全く新しい意味の“ライブラリー・サィエンス”としてそれを体系づけ，図書館学校も結局はそうしたものを教えるところとして描かれているのである。

1887年6月といえば，彼による最初の図書館学校が，非常に困難な事情の下で，とにかく発足を見てから5個月の後であり，さらにはまた4月30日をもって，第1期生に対する講義期間が終了した翌々月に該当する。そしてこの月コロンビァ大学理事会は，デュイから申請の行われていた図書館学校の名称変更，具体的には，“スクール・オブ・ライブラリー・エコノミー”を“スクール・オブ・ライブラリー・サィエンス”と改称したいというその要望に対し，それを適当でないとして拒否したことが記録されている[52]。一方またホワィトによると，そのように校名を変更した場合における教育計画の拡大を中心とした新たな構想が，時の総長バーナード (Frederick A. P. Barnard, 1809-1889) を通じて大学理事会に提出されたのは，5月2日のことであったという。このバーナードは，こと図書館・図書館学校・男女共学という3つの事柄に関する限り，終始デュイとその行動を共にした間柄であった。そしてこの際デュイから提出された書類は，現にコロンビァ大学資料室 (Columbia archives) に保存されており，ただそれが同日をもって，大学内の教科・法規委員会に回付されていることだけは明らかであるが，それ以上のことに関する公的記録は見当らないという[43]。

しかしながら，6月における理事会の回答，すなわち校名変更の不許可，同時にデュイにおける教育拡大計画の不承認は，果して上記委員会の慎重な審議に基ずく決定であったか否かの問題は別として，実はアメリカにおける図書館学教育のその後の発展に対して，非常に大きな影響を与えたものである。すなわちこの通達はたしかに，バーナード総長とデュイとの2人に対して，理事会が図書館学校に対して配慮を加えているとか，それを支持して呉れるなどと期待しても最早無駄であることを確認させたという点では，たしかに効果の大きいものがあったであろう[54]。

---

51) Stokes, Roy Bishop : Education for librarianship. *Encyclopaedia of Librarianship. 2nd ed., rev. Lond., Bowes & Bowes, 1961, p. 130.*
52) Trautman, R.: *Ibid.*, p. 16.
53) White, C. M.: *Ibid.*, p. 114.
54) Trautman, R.: *Ibid.*

しかしそれは同時に，この大学において始めてその根を培った図書館学の教育を，発芽の直後において切断してしまい，“ライブラリー・エコノミー”から，“ライブラリー・サィエンス”への拡大構想を挫折せしめ，延いてはこの国における図書館学の将来に大きな制約を加えるものとなった。そればかりではなく，コロンビァ大学自体にとっても，37年間という長い期間にわたって図書館学の空白時代を残すことになったものである。すなわち1926年に至って，ようやくこの大学は，かってデュイによって構想された企画を復活させることになったからである。現在の図書館学部“スクール・オブ・ライブラリー・サービス”がそれであり，この名称自体は，初代の学部長に就任したウィリアムソンの命名によるものである[55]。

このデュイにおける拡大計画は，具体的にいえば，“ライブラリー・エコノミー”に，さらに上級課程を設けるとともに，ビブリオグラフィー，語学，比較文学などの諸学科を加え，形態的には，“ライブラリー・エコノミー”とビブリオグラフィーの2つをほぼ均衡の情態に保ったものとすることであった。すなわち

> この拡大された教育計画は，ビブリオグラフイーやライブラリー・エコノミーの上級学科はいうまでもなく，語学や比較文学などにおいても相当の勉学を課するものとなるであろう。昨年度実施した成功の中で，顕著なものの1つに，大学内の諸教授によって行われた書誌学関係の講義があり，この面の特徴は今後ますます拡大されて行かねばならないものである。そうすることによって，ビブリォグラフィーが，ライブラリー・エコノミーと同じく十分な取扱を受けることになるであろうし，その結果はおそらく限定的な“ライブラリー・エコノミー”という学校名を，包括的な意味をもつ“ライブラリー・サィエンス”に移行させることを正しいこととするであろう[56]

と述べている通りであり，5月2日総長を通じて大学理事会に提出したその書類では，入学資格を，文科大学の（literary colleges）卒業生ならびに特別試験に合格したもののみに限定し，学位としては，図書館学の学士（B. L. S.）・修士（M. L. S.）・博士（D. L. S.）の3つを準備するものとして，その構想が描かれているのである[57]。

8

デュイにおける教育の構想をたどって行くと，その当初におけるアプレンティスシップの組織化を出発点として，1887年における拡大計画に及ぶ大きな発展があり，結局はオールバニーの図書館学校に至って1つの定着的に到達したと見ることができる。その間わずかに10年であるが，1879年における最初の具体的な構想は，図書館の分野に関する限り，どのような形のものであっても，組織的な教育計画が全く見られなかったその現実に対する反省に基ずいて描かれたものであった。すなわち

> 村の婦人校長に対しても，すぐれた教授法について教えて行く沢山の師範学校がある。医師・法律家・牧師，いや料理人さえも，特別の訓練を受けるための学校をもっている。図書館員の職業は，地位的には非常に向上して来たにも拘らず，彼らは依然としてその仕事を，自分で試み，自ら体験を積み重ねて行くことによって学びとって行かなければならない

55) Munthe, W.: *Ibid.*, p. 133.
56·57) White, C. M.: *Ibid.*, p. 114.

と記しており，その間の事情をよく物語っているものである。こうした当時一般の実情は，1883年8月，アメリカ図書館協会の総会席上，デュイの教育計画に対する最も強力な反対者であり，同時にまた‘図書館人中のネストゥール’(Nestor of librarians)[59]とまで呼ばれていたシカゴ公共図書館長のプール（William F. Poole, 1804-1886）がその反対理由としてのべた次の言葉が端的にそれを伝えているように思われる。

> 実のところ私は，これまでの学校におけるよい教育をその基礎としている図書館内の実際業務そのものが，すぐれた図書館員を教育して行く上の，唯一のしかも正しい方法であると考えて来ているものである

と[60]。この言葉に対しては，‘トゲを含んだ批判’であるとか，‘あるいは最も保守的な考え方の代弁’[61]と見なしているものもあるが，プールの見解は，彼自身のシカゴ公共図書館を始め，ボストン公共図書館，ハーバード大学図書館，さらにはボストン・アセニァムの如き規模の大きな図書館において行わている実際業務が，そのままに立派な教育を提供し，すぐれた図書館員を養成して行く上に役立つと考えているものであり，従って特別の教育計画は不必要であるとする立場を執るものである。もって当時における図書館界一般の実情を想察することができる。

デュイがその最初に提唱した“アプレンティスシップの組織的計画”は，内容的にいえば，アシスタント制と呼ぶことのできるものである。具体的には，すぐれた図書館人のもとで，“補助員”という形で一定期間図書館に勤務し，実習を重ねて行きながら，同時にまた特に計画された授業に参加する制度であり，報酬を得る代りに，研修と教育を受ける機会が与えられる形で考案されたものであった。いわば‘互恵を基にした企画’[62]である。そして契約をもとにした一定期間の館内勤務と補助的な業務を通じての実習は，そのままにアプレンティスシップの形態を導入したものであり，講義への参加は，面接授業（schooling）をそれに付け加えたものである。従ってデュイのいうアプレンティスシップの組織化は，要するに以上2つのものを兼ねる形の制度化を意味する。そしてこのこと自体が，また当時の一般的な事情を反映したものとしてこれを理解することができるであろう。すなわち他の分野においては，この国においてもすでに長い歴史をもつ徒弟的な教育が，漸くその歴史を閉じ始めた時期に該当しており，一方においてはそれに代るものとして“技術教育”（technical education）が，非常な勢で普及しつつあったからである。

これに対して図書館員を養成するための教育は，すでにのべたように，アプレンティスシップの段階すら組織的にはいまだ体験しないままであり，従ってデュイは先ずそれを組織立てると共に，他面においてはまたほかの分野との関連上からも，面接授業を併せ考慮して行くことによって，教育の端緒を切り開こうとしたものであった。そして1884年から86年，すなわちデュイがコロンビァ大学図書館長に就任した翌年から，正式に“スクール・オブ・ライブラリー・エコノミ

58) Dawe, G. G.: *Ibid.*, p. 294.; White, C. M.: *Ibid.*, p. 77.
59) Utley, George Burwell : Fifty years of American Library Association. Chic., ALA., 1926, p. 11.
60) Vann, S. K.: *Ibid.*, p. 25.
61) White, C. M.: *Ibid.*, p. 75.
62) Vann, S. K.: *Ibid.*, p. 29.

ー”が発足する直前の年にわたって，2期のクラスに分けて実施されたいわゆる“予備学級”(preliminary classes) は，デュイが提唱したこのアシスタント制を実地に移したものであった。そして予備学級というこの名称は，次の段階である独立した教育機関，すなわち図書館学校を実現して行く上の確かな可能性をここで探り，それを見極める試験的・予備的な意味をも同時に持つものであったからである。

この予備学級に加った人々がすなわち“生徒補助員”(pupil assistants) であり，1884年における採用者は9名，2期を通じて合計16名（男4，女12）がこれに参加している[63]。ただ当初の構想とは異って，無報酬という建前には修正が加っており，これらの“生徒補助員”は，年間2,000時間図書館の業務を手伝い，それに対して300ドルの手当を受けるものであった。教室授業は週2回，“講義日”(lecture days) として，午後のおそい時間がそれに当てられ，実際には講義を聞いたり，あるいはまた自分たちが現に手伝っている仕事を中心に討論を行ったり，さらには質疑応答を重ねて行く時間に充当されたものである[64]。そしてこの予備学級に参加した1人であるケント (Henry Watsen Kent) の記するところによると，デュイがここで教えた事柄は，ケント自身それ以前には全く知らなかったことばかりであり，すなわちそれは愛書 (love of books) についてでもなく，また書物の学問的な内容 (literary contents) に関することでも，さらにはまた物質的な財宝性に係ること (physical properties) でもなく，結局はどのように図書館を管理・運営して行くか，同時にまた書物を知り，利用する人々の要求をどのような形で預り，それを充すための後立てとなって行くかについてであったという[65]。要するにデュイがその最初において構想したものは，この予備学級において見られるように，実際業務を主体にして，それに講義を結びつけた形態のものである。この間においても実は，図書館学教育の在り方を思索するに当って，デュイの心を捉えていた別の側面があったことを見のがす訳には行かないのである。

9

それは図書館業務に密着した形の訓練とはおよそ対照的な性格のものであり，しかも1877年，すでにヨーロッパ人によって“アメリカ的アイディア”と呼ばれるほどに，1つの与論として，識者の間には，一応定着する段階にまで到達していたものである。そしてさかのぼればそれが，この国の偉大な思想家エマーソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-82) の唱道したところに連ることから，“エマーソンの図書および読書教授職”[66] (Emersonian professorship of books and reading) と呼ばれているものがそれである。

ホワイト教授によって，‘図書館学教育関係文献中の開拓的論稿’[67]とされているその文献は，1870年に刊行されたエマーソンの“社会と孤独”(Society and Solitude) の中に収められた一篇

63) Trautman, R.: *Ibid.*, *p.* 11.; Vann, S. K.: *Ibid.*, p. 29.
64) White, C. M.: *Ibid.*, p. 93; Trautman, R.: *Ibid.*, p. 11.
65) White, C. M.: *Ibid.*, p. 62.
66・67) *Ibid.*, p. 71.

“書物”(Books)[68]を指している。そして彼はこの文中で“図書の教授”(professor of books)という見解を提示しているのである。彼はその中で

> 1858年現在で，パリの帝国図書館 (Imperial Library at Paris) は，印刷された書物の数だけでもおよそ80万冊，年間増加冊数を1万2,000と見た場合，おそらく優に100万冊を越えるものとなっているであろう。一方，如何に勤勉な人であったとしても，その人が1日のうちに読むことのできる書物のページ数は，いずれにしても知れたものである。またその生涯を通じて，すぐれた環境のもとで読書を続けて行くことができる年数も同様である。たとえば60年間その人が，夜明から暗くなるまで読み続けて行ったとしても，図書館内で手前の方に位置しているアルコーブ (alcoves) の書物を読んでいるうちに，その生涯を終らざるを得ないことになる

とのべている。すなわちすでに多くの数に達し，また不断に加わりつつある人間記録の中から，自分にとって最善のものを獲得して行こうとすれば，それをたどって行くための，何んらかの道筋 (rule) あるいは手段 (method) が当然必要となるにも拘らず，どの大学においても，それについて研究しまた教えて行く教授 (professor) が準備されていないことに言及し，そのための教授職が必要であることに触れているものである。

このエマーソンの考え方をさらに詳しく展開した形を執っているものに，パーキンス (F. B. Perkins, Boston Public Library) およびマシューズ (William Mathews) の2人によって，“図書および読書の教授職”(professorships of book and reading) 設置の必要を力説した論考がある。しかもそのいずれも，アメリカ独立百年期を記念して，連邦政府内務省教育局によって，18-76年に刊行された“アメリカ合衆国公共図書館報告書”の中に収められている[69]。おそらくこれはこの報告書の編さんに携ったウォリン(S. R. Warren) およびクラーク (S. N. Clark) の企画とその依頼によって上記の2人がその執筆を担当したものと見ることができよう。そのことはまた同時に，この問題が当時すでに図書館界において重要な課題として採り上げられつつあったことを物語る。

もちろんパーキンスおよびマシューズ両者の説くところは，細部の点においては異っているが，2人とも，図書生産の激増・図書館の急速な発展を前にして，少くとも規模の比較的大きな大学ともなれば，学生たちに対して，何を読むべきかについてではなくて，如何に読むべきであるか，換言すれば，印刷された知識を取扱う上のその方法論について教授する全く新しい講座を追加すべきであることを提唱している点においては同じ論旨の上に立っているものである。パーキンスは，読書資料の増大が，何人にとっても，もはやそれを自分の力だけで捕捉することのできる限界を通り越えてしまい，しかも測り知ることのできない領域にまで広がってしまった以上，その実態について研究し，また学生たちが，必要とするものを正しく選び出して行く上に必要な

68) *Everyman's Library* 所収のものでは，p. 87-103. “図書の教授”という言葉は p.88.

69) U. S. Bureau of Education : Public libraries in the United States of America ; their history, condition, and management. Special report. Wash., U. S. Govt. Printing Office, 1876. p. 230-251. *Chapter IX : Professorships of books and reading.*
I.—On Professorships of books and reading, by F. B. Perkins. (p. 230-239).
II.—Professorships of books and reading, by William Mathews. (p. 240-251).

技術的・専門的な指導が正当なものとなって来たとのべた後，当時における読書の実態についてするどい批判を加えている。すなわち

一般読者に関する限り，過去および現在の人間知識，ならびに精神活動に関する印刷記録は，いまだ全く軌道をもたないままである……。現在読書に関する問題は未組織化の情態であり，非科学的で，すべて経験的条件のもとに放置されている。たとえていえばそれは，コンパスの使用・科学的天文学の応用以前の航海術，さらにはまた，地質学・鉱物学・科学的工学などを導入する以前の採鉱（mining）にも相似たものである

としているが，彼によると，図書および読書についての科学的な教育こそが，人々の思考を正しい方向に導き，大きな希望を抱かせ，かつ知識ならびに思想を獲得する上に，現実によって加えられているその限界を押し拡げて行く期待を与え得るとされて，その重要性が力説されている。

またこのような論考が見られる翌1877年は，ロンドンにおいて，イギリス図書館協会の第1回総会が開催され，同時に国際図書館会議（International Library Conference）のもたれた年である。そしてこれに参加することになったアメリカの代表17名が，真剣な討論の対象としたのも，外ならぬ図書館学校教育（library school training）の問題であった[70]。もちろんメルビル・デュイもそのなかの1人であったが，この国際会議において，オール・ソゥルズ大学（All Soul's College）のロバーツ（Charles H. Robarts）が，“図書の教授”（professors of books）を任命しようとする“アメリカ的な考え方”に対して，それが図書館および図書館員のもつ役割を近代化して行く上に寄与することの大きい点を指摘して，それに賛意を表したことが記録されている[71]。アメリカ代表団が，エマーソンによって7年前にすでに提唱され，パーキンスやマシューズによってさらに展開されて来た思想を，この会議の席上において，彼ら自身の中心的な考え方として伝えたためである。

以上のようなアメリカ図書館人一般の間に，次第に定着して行った思想はまた，デュイにとっては最も身近かであり，彼をコロンビァ大学図書館長に迎え入れた直接の責任者であると共に，また図書館学校の問題については，その苦難を分ち合ったバーナード総長に対しても強く反映している。具体的には“書誌学教授職”（professorship of bibliography）[72]を大学の中に新しく設置する構想であり，結局当時指導的な図書館人はもちろんのこと，図書館学教育に関心をもつ人々の間には，それが“図書の教授”・“図書および読書の教授”・“書誌学の教授”を中核とした形で意識されるようになっていたと見ることができよう。そしてホワィト教授は，いずれにしても図書館学教育を，その創始に培って行った第一の要因といえば，図書館がその数・規模・複雑さにおいて急激に増大して来たことにあったことを指摘しているが，この図書館の発展という点からいえば，この国が独立を獲ち得た1776年当時にあっては，何んらかの形において一般の人々も利用することのできた図書館の数は，13州（植民地）のものを合してわずかに29館，蔵書数は4万5,623冊にすぎなかった[73]。それがデュイの生れた前年に該当する1850年では694館となり，

70) Trautman, R.: *Ibid.*, p. 7.
71) White, C.M.: *Ibid.*, p. 69.
72) *Ibid.*, p. 79.
73) *Ibid.*, p. 14.

蔵書数220万2,632冊，5万冊以上をもつものが5館に達し，さらに独立百年期を迎えた1876年では，図書館の数は3,682館，蔵書数1,227万6,964冊，年間増加冊数100万冊，しかもこの数字は，地区学校図書館（district school libraries）が所蔵する136万5,407冊を含まないものである[74]。

10

1883年5月デュイがコロンビァ大学図書館長となるに際して，バーナード総長を通じて大学理事会に提出し，ついで8月アメリカ図書館協会のバッファロー（Buffalo）会議に提示した図書館学校の教科内容に関する草案は，彼が4年前の1879年，始めて教育についての構想を公表したものとは，性格的にも全く異ったものである。もちろんこの草案は，1つのまとまった課程表といえるほどのものではなくて，彼が描いた大ざっぱな輪郭にすぎず，中には 'for want of better name' と自ら書き残しているように[75]，その学科名を記するに当っても，より適切な名称を探し求めていた過程中のものであったことを示している。すなわち

1. 実用書誌学（Practical bibliography）
2. 書物（Books）
3. 読書（Reading）
4. 文献的方法（Literary methods）

の4項目がそれである[76]。しかもデュイにおいては，これら各々の言葉が意味しているものについては，彼独自の解釈を多く含んでいる。すなわち“実用的書誌学”というのは，彼によると，どの著者，どの論文が要求されているかについて教える学科であるとされており，その点イギリスのブラウンが，“practical bibliography”について，それをビブリオグラフィーの実際面を取扱うものとしている[77]のとは著しく異ったものである。また“書物”という学科はデュイの場合，どの版（edition）の書物が最もすぐれたものであるかを教えるものであり，“読書”では，書物の中から自分の必要とするものを，最も迅速・確実に入手する方法を教え，“文献的方法”では，書物から得られたものを，どのように記憶し，分類し，排列し，さらには索引をつくって行くか，すなわちあらゆる方法をもってそれを将来利用できる形態につくり上げて行くその方法について教えて行くものであるとしているのである。

リー教授（Robert D. Leigh）ものべているように[78]，コロンビァ大学の中に，最初の図書館学校が誕生したことは，デュイ自身がそのように計画したというよりは，むしろ偶然がもたらしたものであったと同様，彼がこの大学の図書館長に就任したこともまた偶然であり，しかも彼が教育について当初構想したものは，独立した学校としてではなくて，図書館内におけるいわば

74) U. S. Bureau of Education : *Ibid.*, xvi.
75・76) Rider, F.: *Ibid.*, p. 42.
77) Brown, James Duff : A manual of practical bibliography. Lond., George Routledge & Sons, [1906]. *Preface.*
78) Bryan, A.: *Ibid.*, p. 302.

“啓蒙的徒弟主義”(enlightened apprenticeship)[79] ともいうべきものであったために，推考の余地を多く残したまま，いそぎ提出するに至ったものと見るべきであろう。しかしながらこの科目構成の中には，“書物”および“読書”の2学科が掲げられており，それはそのままに，すでに述べて来た“書物および読書の教授”に該当するものである。また残りの2学科にしても，いずれも書物そのものを対象とし，全体としては著しく書誌的な面に傾斜した性格を執っている。その点当初の構想とは全く対照的であり，ために，‘実務的訓練から書誌的教育への移行’[80]を顕著に示したものというべきであろう。このことは，それぞれの図書館内における実務の習得とは異なる大学内での独立した教育機関の在り方として，当時すでに多くの人々の間に定着して来た“書誌的教授職”の思想が，デュイに対しても，この時強い影響を与えたと見なさねばならない。

しかしながら，それより3年後，すなわち図書館学校開設の時期も次第に押しせまって来た1886年，さらに新しく発表した教科内容の草案は，これを1883年のそれと比較すると，また著しくその性格を異にするものとなっている。これはその最初に“ライブラリー・エコノミー”を置いた，全部で14の主題にわたるものであり，その中には“読書と援助”(reading and aids)・“文献的方法”・“書誌学”なども加っており，従って1883年のものを含めた形をとってはいるものの，全体としての構成は著しく実際的なものに片寄っている。そのためそれを“実用主義的構造”と呼んだり，あるいはまたそれは‘今日，図書館業務の職務分析と呼ばれているようなもので構成されているにすぎない’と評されているように[81]，図書館の実際業務と深く結びついたものをその主体としている。従って1883年のものが，上述のように実務的訓練から書誌的教育への移行であったとすれば，この1886年のものは，書誌的教育から実務的教育への再移行であり，さらに的確には，書誌的教育の実務的教育への復帰とも見なすことができよう。しかもこのような教科課程の設定には，3個年にわたりデュイが実施した“予備学級”から得られた実地の体験に大きく依存し，それに則した形を執ったものである点が指摘されている[82]。すなわち1883年のものは，いわば全くの素案(rough draft)[83]であり，それを一応の足場として，デュイは，ライブラリー・エコノミーの学校としての図書館学校の教科内容を，次第に具体化して行ったと見ることができる。そして1884年彼が，その内容として一応掲げているものに，図書館についての関心を高める問題，予算の増強，図書館の位置，建築，暖房，照明，換気，配架，備品，人手を省くためのいろいろな工夫，理事会および図書館委員会，図書館職員の資格とその条件，さらにはまたその任務・職名・待遇・休暇，図書および定期刊行物の選択，実用的書誌学，図書，版次の選定，読書法，製本，図書の補修などがあり，正しくそれは‘途てつもないトピックのら列’(bewildering array

79) Lancour, Harold : Discussion, Historical development of education for librarianship of the United States by Louis R. Wilson. *Education for Librarianship, ed. by Barnard Berelson.* Chic. ALA., 1949, p. 60.
80) White, C. M. : *Ibid.*, p. 78-79.
81) Vann, S. K. *Ibid.*, p. 31, 30.
82) White, C. M. : *Ibid.*, p. 80.
83) Vann, S. K. *Ibid.*, p. 30.

of topics)[84] と評されている通りである。結局こうしたものが，それより2個年の間に，次第に煮つめられて，相関連するものはまとめられ，一応組織的に仕上げられて行ったのが1886年のそれであった。しかもこれは，1883年のものがまとっていた書誌学的性格を大きく脱ぎ捨ててしまうことによって始めてなし得られたものである。

これを要するにデュイによって設定された“スクール・オブ・ライブラリー・エコノミー”の教科内容は，ヨーロッパの図書館員に伝統的に課されて来たものとも，またアメリカにおいてエマーソンの主張に連るものともそれは別個であり，同時にまたコロンビァ大学の中において当時重きをなすと共に，デュイとは極めて近い関係におかれていたバーゼス教授（John W. Burgess 1844-1934）の力説するところともまた異ったものである。

このバーゼスは，1871年すなわちデュイより4年前に同じくアーモスト大学（Amherst College）を卒業し，一時イリノイで教職についた後ドイツに留学，ゲッチンゲン，ライプチッヒ，ベルリンなどの諸大学で政治学を研究して1873年帰国，母校の教壇に立った人であるが，1876年招かれてコロンビァ大学に転じた[85]。その帰国の年が，デュイによって十進分類法が創案され，アーモスト大学にそれが採用された年に該当しており，1876年はまた，デュイがこの大学を去ってボストンに赴いた年であった。従ってデュイがここの大学図書館に残した改善上の業績については詳細を自身目撃し，それに高い評価を加えていた1人である。彼がコロンビァ大学に転じたのは，ドイツの大学から受けた強い印象，わけてもその学究的な教授方法，具体的には創造的な研究・セミナー・原資料の広範な利用を重視している点であり，コロンビァ大学における法律学の上級課程においては，このドイツの方法を導入し得るとの期待を抱いたからである。しかしこの期待は裏切られ，彼を特に失望させたのは大学図書館であって，蔵書はわずかに2万5,000冊でアメリカの図書館中では第49位，さらに蔵書の配列・目録の整備という点においては，アーモスト大学にはるかに立遅れた形であった。彼が進んで図書館長の職務を引き受けたのはそのためであり，結局はバーナード総長とともに専任の図書館長を迎えて，大学全体の立場から図書館機構の改善を図り，目録組織の統一を始めとする諸般の改革を行うべきであると考えるようになった。デュイのコロンビァ大学への招聘には，このバーゼス教授の力が与って大きかったといわれている[86]。それのみではなく，バーナード総長，バーゼス教授，メルビル・デュイの3人によって，図書館員を養成して行くための新しい課程も，部分的には協同でその計画が推進されたものと考えられている[87]。

しかしながらこと教育に関しては，このバーゼス教授の執っている立場は，デュイのそれと根本的に異っている。すなわち彼は，当時非常な勢いで普及を見つつあった技術教育に対する最も有力な反対者の1人であり，それに対する強い圧力となっていた人である[88]。彼の立場というの

84) Vann, S. K.: *Ibid.*, p. 30.
85) Trautman, R.: *Ibid.*, p. 4-5.
86) Dawe, G. G.: *Ibid.*, p. 186.
87·88) White, C. M.: *Ibid.*, p. 79.

は結局は自由主義的方法（liberalizing approach）であり[89]，従って学問的職業（learned profession）に対しても，この見地からきびしく反省を求めている。すなわちそれが実際的なものと直接結びついた形を執っていた当時の実情に向って，教育はそのような形態からは身を退くべきであると主張し，単なる1つの技術（technique）として取扱われている情態から離脱して，本当の学問的な地位に高められて行くように計画されている研究に従事すべきであることを主唱した人であった。自然学生たちに対しても，そうした職業と実際的なこととの2つが，とかく直結しようとするその誘惑を避けるためにも，広く同族的（cognate）さらには補助的な研究（auxiliary studies）に，勉学の範囲を及ぼして行くべきであることを強調している。

この立場は，やがて開校が予定されている図書館学校についてデュイが，この学校は，きびしく自らを独特の勉学面のみに限定し，従って一般教養を与えようとしたり，あるいはこれまでの教育において欠けているものを補おうとしたりするものではなくて，純粋に技術的なコースであるとしている[90]のとは正反対のものである。そのためデュイのこうした言葉は，あるいはバーゼス教授などの執る立場を意識しながらなされているかの感さえ与えるほどである。

11

1887年デュイが，バーナード総長を通じて大学理事会に提出した教育の拡大計画，ならびに図書館学校の名称変更についての申請は，図書館学教育のあるべき姿について，彼における究極的なものを示していると見て差支えないであろう。すなわち1886年の教科内容は，あたかも葉菜類が，その菜葉を重ね合せて行きながら，1つの球状を形づくって行くのと同じ形で，14の主題がそれぞれに重なり合い，結局は“ライブラリー・エコノミーの教授”（professor of library economy）として結球したものとして解するならば[91]，デュイの次の段階は，彼のいうライブラリー・サィエンスとしての新しい結球をなしとげることであったということができる。それによってまたアメリカの図書館学，延いては世界の図書館学とその教育は，また新たな展開を遂げたであろう。コロンビア大学理事会が，このデュイにおける究極的な構想を挫折せしめたことの意味には，従って非常に大きなものがあるといわねばならない。

一方またデュイにおけるその構想は，一見その過程の上に，著しい変転の跡を残していることも事実である。しかしそれも結局は一応の到達点をライブラリー・エコノミーに求め，それに内容と体系とを与えることに落着くまでの足取りとしてながめることができる。しかもその変転の軸として作用しているものは，教育における実際的な面と，書誌的な面との2つであり，デュイは先ず前者を定着せしめ，その上に後者を重ねて行くことによって両者の統合を成し遂げようとしたものである。しかしながら結果的にはそれを果し得ない形でコロンビァ大学を去らねばならない事態に追いこまれ，またオールバニーに移った以後は，それをいよいよ困難とするものにな

89) *Ibid.*, p. 165.
90・91) *Ibid.*, p. 80.

った。彼における図書館学教育が“ライブラリー・エコノミー”の領域に止ってしまったのはそのためである。それは彼の構想がそれ以上には出でなかったという意味ではなく，そのことを不可能にする制約のもとに置かれていたからである。

12

俗に“デュイ的伝統”と呼ばれているものも，要するにそれは，デュイ自身の構想が，“ライブラリー・エコノミー”の世界を出でなかったという理解のもとに，その限られた教育の内容，実際的・技術的な性格を批判の対象としている場合が多い。また同時にデュイのものについで現われた多くの図書館学校が，ひとしくその轍を踏む形を執って行ったことも事実である。しかしより重要な課題は，デュイをしてついにそうした領域の中に止まらしめたもの，さらにはまた彼が究極において目指していた“ライブラリー・サィエンス”の教育を，爾後長い期間にわたって実現不可能なままにおいたもの，それら実体の追求であろう。それによってこそ始めてデュイは最も正しい姿において理解されることになるであろう。